

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年6月28日発行「補習校だより」第11号より抜粋

係る言葉は受ける言葉の近くに置く。

日本語では、何が - どうする(主語-述語) どんな - 何(修飾語 - 被修飾語)のように、前の語が後の語へ係っていきます。そうでないものを指して「倒置法」とことさら呼ぶのはその例証です。

実際の表現では、「どこの - だれの - いつの - 何が、いつ - どこで - どんなふうに - どうした」というように、二重、三重に言葉が係ってきます。正確に、詳細に表現しようとするれば当然のことですが、そうすると「達意」を保つのが難しくなります。文章は、書いているときの自分以外に向けたものですから、後日の自分を含む読み手が一読して理解できるよう配慮しなければなりません。つまり、本項は、正確に、詳細に表現し、なおかつ達意の文章を書く技能ということになります。

では、本項が実際にどのように役立つのか、例で示します。 が補習授業校の中3生による原文で、 は私が添削したものです。

- a その途中でおべんとうを湖のそばのおかの上で食べました。
その途中の湖のそばのおかの上で、おべんとうを食べました。
- b 今本当にこの本と出会えてよかったと思う。
今この本と出会えて、本当によかったと思う。
- c きっと、これが僕にとっての最後の自分らしさを取り戻すチャンスでしょう。
これがきっと、僕が自分らしさを取り戻す最後のチャンスでしょう。
- d 必ず、一冊ホームズを読んだ夜は、こわい夢を見るのです。
ホームズを一冊読んだ夜は、必ずこわい夢を見るのです。
- e 先生と二人で週に一度の個人レッスンのとき、試験に向けてがんばった。
週に一度の個人レッスンのとき、先生と二人で、試験に向けてがんばった。

a ~ e で正したのは、次の関係です。

- a おべんとうを 食べました
- b 本当に - よかった
- c これが - チャンスでしょう
- d 必ず - 見るのです
- e 二人で - がんばった

要するに、離れた位置にある「係る言葉」を、できるだけ「受ける言葉」の近くにもってきたということです。「できるだけ」というのは、意味が正しく伝わりさえするならば必ずしも「受ける言葉」の直前でなくてもかまわないということです。どこに置くかの判断は、声に出して読んで決めます。 で述べる音調によるということです。